

第4期 事業報告書

期間：令和4年11月1日～令和5年10月31日

1 総括

第4期は既存事業に加えて、既存事業のブラッシュアップを中心に行った。

メインとなるメディア運営事業に関しては、高梁川流域ライター塾の修了生を中心に活動するライターが増え、特に倉敷では毎月10本以上の記事が公開できるようになるなど、プラットフォーム力が高まっている。ただし、メディア運営事業はほぼ売上がない「赤字事業」であり、事業継続に向けて収益を上げる仕組みを構築しなければ継続は困難な状況。

セミナー事業についても堅調で、ライター育成と出口戦略となるメディア運営の相乗効果が生まれ、新たな行政との取り組みも増えてきている。

全体として今期は、前期に引き続き黒字をキープできたが、財務体質としては未だ脆弱な状況で改善したいが、その道筋は未だ見えていないというのが現実となっている。

2 収支

経常収支として、573,128円の黒字となった。前期に引き続き黒字決算となったが、これは今期利益率の高い案件が受注できていた影響が大きい。また、役員報酬を前期に続き大幅にカットしており、「無理をした結果の黒字」である。

収支改善に向けて売上増はもちろんだが、赤字事業であるメディア運営をより多くの人に支えてもらう仕組みの構築を目指して行く必要がある。

3 実施した事業

メディア運営事業（とことこシリーズ）

倉敷とことこ・備後とことこの既存メディア運営を行った。倉敷とことこは、年間通じて月間10万PV程度を維持しており、活動するライターの増加し安定した運営を行っている。

備後とことこについては、今期山口ちゆきさんを福山エリアマネージャーに据えて運営を行ったが、福山での記事数増加・地域との関係構築が進むなどの成果がみられた。結果として、福山重視、笠岡・尾道の比重を落とすことになったが、活動ライター数からみれば妥当な運営になったと判断している。

また、倉敷・備後ともにリリースから数年経過し、情報が古くなった記事も増えているため、既存記事のメンテナンスにも注力した。結果、前期より公開記事数は大幅に増えている。

メディア	今期公開記事数	前期公開記事数	前期との比較
倉敷とことこ	173本	133本	+40
備後とことこ	103本	72本	+31
合計	276本	208本	+71

※公開記事数は既存記事の最新化も含む

メディア運営事業は収益がほぼない「赤字事業」である。反面、はれとこを代表する事業であり、現在協力いただいている方もほぼ全員が「メディアに共感して」参画している側面がある。現在の状態では事業継続が困難な中で、どのような形なら継続できるか。来期はその方向性を決定しなければならない。

セミナー事業（高梁川流域ライター塾）

前期からの継続事業として、浅口市民ライター育成講座「高梁川流域ライター塾 2022」を実施した。また、今期は井原市・矢掛町にて「高梁川流域ライター塾 2023」も開催した。

講座名	開催期間	申込者数
笠岡市民ライター育成講座 「高梁川流域ライター塾 2021」	2021年9月12日 ～2021年11月14日	207名
浅口市民ライター育成講座 「高梁川流域ライター塾 2022」	2022年8月28日 ～2022年10月30日	135名
高梁川流域ライター塾 2023	2023年9月3日 ～2023年10月22日	128名

高梁川流域ライター塾 2022 については有料化した効果もあり、42名の修了生を輩出している。

高梁川流域ライター塾 2023 は福武教育文化振興財団の助成金に採択されたが、自走を目指しているため前回に続き値上げを行った（3,000円→8,000円）。受講者は半分程度になると予想していたが、最終的に「128名」とほぼ前回並みの受講者をキープしている。

ただし、受講生の大半は「岡山県外」であり、今回井原市・矢掛町で開催したものの開催地の受講生が少ないという問題が発生した。「高梁川流域」と名付けている理由は、「高梁川流域地域づくり連携推進事業」の採択事業であったことに起因している。このため、「高梁川流域圏で今後も開催して行く」というミッションを背負っている認識だったが、実態としては求められていないし、考えすぎであることが数字でも明らかになった。

このため、高梁川流域ライター塾については、令和6年度に倉敷で開催して終了することを決定した。その後は、福山市など岡山県外の人でも参加しやすいような講座名に変更し、継続する方向を模索する。

セミナー事業（市民レポーター教室）

今期は「令和5年度市民企画提案事業」として、倉敷でのみ「市民レポーター教室」を実施した。

講座名	申込者数	投稿記事数
倉敷市民レポーター教室	46名	11本

「新規もの」であった前年度と比較すると申込者・投稿数ともに低調だが、本事業は元々3年かけて完成させ、あとは「運営の手間をかけずに継続する」ことを目標としている。今期は、地域の団体（大原美術館など）の協力を取りつけることに成功し、活動中のレポーターにアンケート調査を行い、次年度に向けた改善ポイントの選定を行った。

今回あがった課題を解消し、来年度は事業の完成を目指して引き続き推進する。

受託事業

今期の売上アップには受託案件の増加が大きく寄与した。特に倉敷では地域との関係性が深まる中で引き合いは増える傾向にある。しかし、メディア運営事業の負荷が上がった結果、マネージメントができる役員の対応工数が確保できない状況も発生している。

今期は所属ライターのスキルアップに繋がるライティング案件、パートナー企業への委託で完結する案件を中心に受託しており、ここでも収益はないが看板であるメディア運営事業を重視するか、収益性を重視するかという二択に迫られる状況が発生し、課題となっている。

広告戦略と寄付募集

今期倉敷ととこが5周年を迎えたため、「とここサポーター」制度を創設し、メディアへの広告・高梁川流域ライター塾などへの事業協賛を一元化した。並行して前期に引き続き「Google Ad Grants」を利用した広告活用も継続実施している。

これらは長い目でみて育て、周知していく取り組みであり、短期的な結果を求める事業ではないが、はれとこの現状（収益のないメディア事業が負担となっている）状況からいえば、「のばす施策」を考えるべき時期に来ている。

児童養護施設へのPC・スマホ貸与

令和4年度以降は諸般の事情により、PC提供元であるピープルソフトウェア株式会社からの貸与が大幅に減少したため、2021年12月の貸与を最後に過去に貸与したスマホのサポートが中心となっている。今期も同様の動きで、問い合わせベースでの対応が中心であった。

4 体制

4期は以下の体制で運営した。

代表理事	戸井 健吾
副代表理事	岡本 康史 西山 博行
業務執行理事	村上 智英 森田 美紀 後藤 寛人 池上 慶行
理事	杉原 佑友太 木本 憲志
監事	坂ノ上 博史 中原 牧人

以上。